

本立に囲まれた放牧場で、十数羽のダチョウの群れが所在なげにうろついていた。塚本康浩さんが近づくと、ダチョウたちは恐る恐る塚本さんの手からエサをついばみ始めた。体高が2m以上もあるのに追られると追力満点だ。「この牧場に通り始めて11年になります、週に1、2回しか来ないからダチョウたちに顔を覚えてもらえない。今日は、エサを持っていくから近寄ってくれただけですわ」

ヨウに慣れて観察を始めたのは98年。その後5年間は研究もせず、ただただダチョウを眺めていた。「ダチョウって見ているだけで、ホッとできるんですわ。あきれれるほどアホな鳥で、自分から牧場の柵に引っかかって、首の皮がペロンと剥けてしまう。カラスの大群に尻の肉を食いちぎられているのに、平然とエサを食っていることもありです。でも傷の治りもものすごく早い。この免疫力の高さを薬に利用できるかもしれないと思って、03年から

本格的に研究を始めました。当時は出身校・大阪府立大学の准教授だった。塚本さんのもとで鯉の研究を行っていた大学院生の足立和英さんに声をかけ、助手を引き受けてもらった。



ダチョウの卵とダチョウマスク。この卵ひとつから、約8万枚ものマスクを製造できる。

あの豚インフルも!? 新型インフルエンザ予防の「抗体マスク」を生み出した「ダチョウ博士」が語る

ダチョウに教わった「アホガ」

もケガをしないように、塚本さんと足立さんは白衣にヘルメットをかぶり研究を続けた。「足立くんには、ダチョウ研究で博士号を取らせようと思っ

現在は動物衛生学などを教えている塚本さんだが、昨春まで在籍していた大阪府立大学では解剖学を教えていた。「獣医になるためには解剖実習は欠かせません。ほくらの学生時代は、興味のない実習のときは平気でサボっていましたが(苦笑)、それに比べていまの学生はまじめだし、成績も優秀です。出席率も90%以上で、サボる学生がいないんですよ」

この傾向は解剖実習にかぎったことではないという。「文部科学省の指導で、出席日数が足りない試験が受けられないなど、最近の大学は高校の延長のようになってきました。出席率が高いのはそのせいかもしれません。でも、



●著者をたずねてみました NICE TO SEE YOU!

塚本康浩さん

つかもと やすひろ

1968年京都府生まれ。京都府立大学大学院教授。獣医師。獣医学博士。小学生のときからスズメ、インコ、ニワトリなどあらゆる鳥を飼い始める。大阪府立大学農学部獣医学科に進学後はニワトリの研究に没頭。大学院時代に書いた論文が注目を集め、活躍が期待されていた。この間、臨床医として動物病院にも勤務。'98年より、フライングでオーストラリア神戸牧場でダチョウの主治医に。'08年6月に、ダチョウの卵から抽出した抗体から、新型インフルエンザ予防用の「ダチョウマスク」を開発。この抗体をもとに食中毒予防、がん治療薬美容などの研究に取り組む。

最近の学生はいわれたことしかできなくて、応用がきかないところがある。解剖実習では血管や臓器など動物の体のすべてをつぶさに観察する。その際、「実験動物の血管の付き方が、テキストと違う」と慌てる学生がいる。「解剖学の教科書に書かれているのは、あくまでも基本。生き物の構造は個体によって少しずつ違う。そういう、揺らぎ、があることを知らなかったという程度ならまだいいんですが、教科書が間違っているという文句をいう学生がいる。これには驚かされます」

「解りたくても、学生を叱ると「授業料を払っているのだから、教員にはわかるように教える義務がある」とへ理屈を返す。この頃、モンスターペアレントは、塚本さんの学生時代には考えられなかった。「うちにも5才の娘がいて、わが子をかわいと思う気持ちにはよくわかります。ほくなんかダチョウに対しては独占欲があつて、本を通じ大勢の人に魅力を伝えられてうれし

かかげ、顕微鏡下で動物のフンの中から寄生虫の丸い卵を見つけ出すのがほかの人より早かった」と笑う大らかさは、平成生まれの学生にはないらしい。「ほくらの学生時代は先生たちもええ加減で、おまえら勝手にやれみたいな感じでした。親もそうです。しようがないからバチンコ玉みたいに、自分こちにつつかりながら、自分こちをわし場所を探しました。ほくらは臨床医にも憧れていたんで、大学院に進んでから研究生活と同時に動物病院でも働いた。新婚の嫁はんを連れて、カナダに留学していた時期もあります。そういう遠回り、に見えるいろんな経験が、結果的にダチョウ抗体マスクの開発につながったと思う」

食肉用の家畜としてはあまり役に立たなかったダチョウの秘めたる力を、異常な愛情で発見した塚本さん。最初は何からも相手にされなかったが、いまやがん治療や美容分野での研究も進められている。

だが、と塚本さんは続ける。「学生の思考がマニュアル化して広がらないのは、いまの大人たちの干渉しすぎが影響しているのかもしれないね」

学生の話になった途端、苦笑まじりの言葉が増えた。学生時代に授業をサボり通ったバチンコ店で、バチンコ玉を目で追う癖がついた。「お

挫折や失敗をくり返しても、自分の興味に忠実に生きてきたからこそ、こんな言葉もぐんと重みを増す。